

第2章 生駒らしい景観の特性

第2章では、「地勢」「地域性」「暮らし」の視点から生駒らしい景観の特性を示します。

1. 地勢

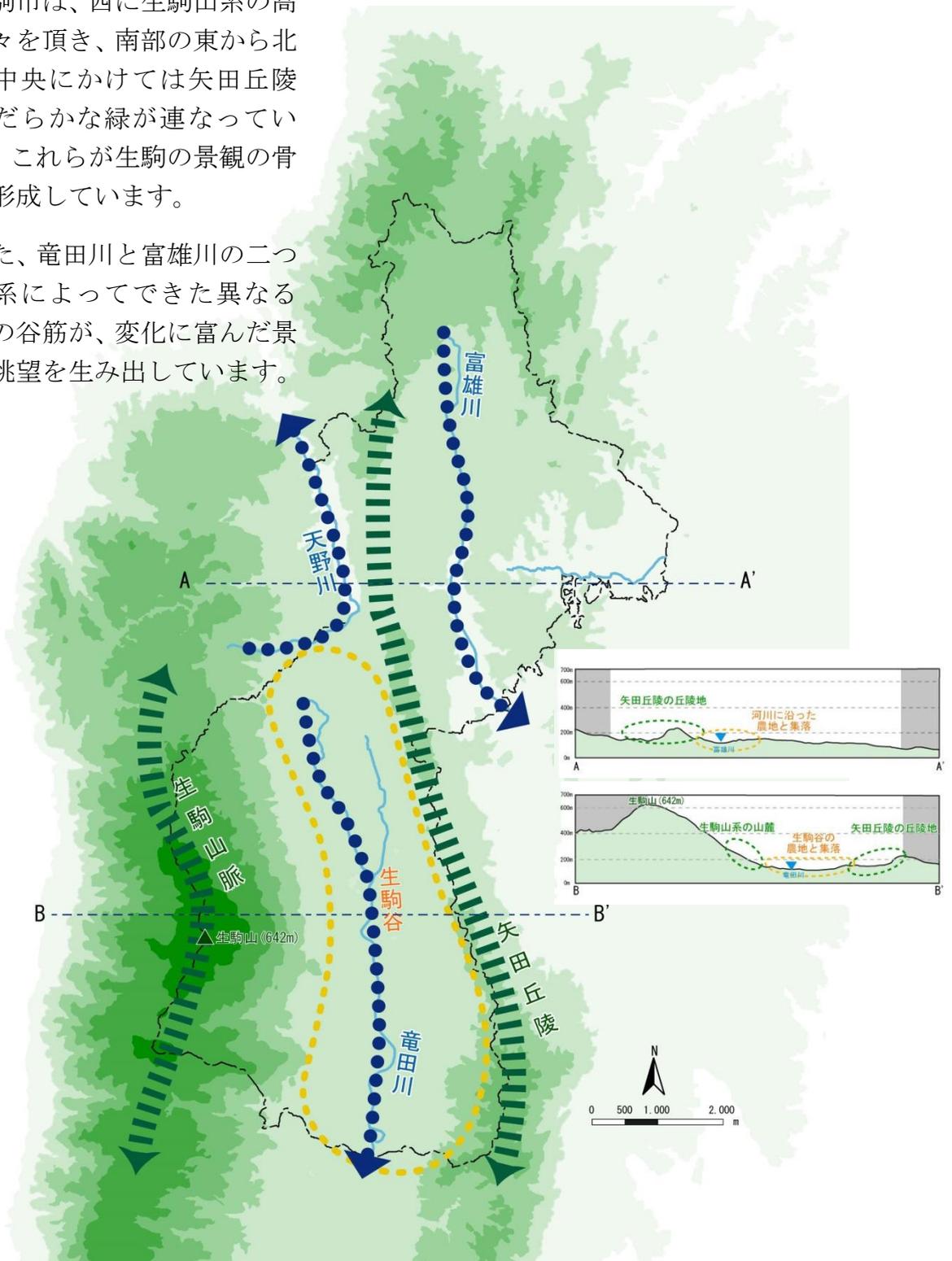
生駒の地形が形づくる景観の骨格



(1) 生駒の地形の骨格

生駒市は、西に生駒山系の高い峰々を頂き、南部の東から北部の中央にかけては矢田丘陵のなだらかな緑が連なっています。これらが生駒の景観の骨格を形成しています。

また、竜田川と富雄川の二つの水系によってできた異なる地形の谷筋が、変化に富んだ景観や眺望を生み出しています。



生駒の地形の骨格

1) 生駒山系と矢田丘陵がつくる生駒谷

百人一首にも詠まれ、紅葉の美しさで名高い竜田川。その流域は、生駒山と矢田丘陵の緑に囲まれた谷で、通称「生駒谷」と呼ばれてきました。

生駒山は竜田川の西側に沿うように南北に伸びています。竜田川周辺から眺める生駒山は、お椀型で独立した美しい形の山です。

一方、それより低い東側の矢田丘陵も、生駒山と並行するように緩やかな緑の壁をつくり出しています。生駒谷が「谷」の印象を深くしているのは、富雄川流域と比べて東西を山に守られた印象からもたらされるのではないのでしょうか。

また、生駒山の山麓や矢田丘陵の斜面にある住宅地からは、互いに谷の向かい側が良く見渡せます。このように「生駒谷」がつくる凹型の地形によって、「見上げる、見下ろす、見渡す、見通す」という、様々な角度の眺めを楽しむことができるのです。

見上げる景観



市役所付近から見上げた生駒山の眺め（東新町）

見下ろす景観



宝山寺付近から見下ろした眺め（門前町）

見通す景観



国道 168 号を見通す眺め（壱分町）

見渡す景観



見渡す眺め（南山手台）



富雄川の河川景観（上町）

2) なだらかに広がる富雄川流域

北から流れる富雄川の水源地は、江戸初期に開掘された黒添池くろんといけです。市の北端・高山町の中でも北の山地にある黒添池から流れる富雄川は、南に行くほど起伏がなだらかになり、周辺も広がりのある景観になります。

高山町の南の方では、田んぼが広がっていて、その周りを里山が取り囲んでいます。そのためでしょうか、富雄川流域では、生駒谷のように互いに向かい合うという感じはなく、川を中心に空間がこちよく広がっている感じを受けます。



田園景観（高山町）



矢田丘陵から見た生駒山（小瀬町）

（２）生駒山の存在感

１）いつもそこにある生駒山

生駒山の姿は、生駒谷のあらゆる場所から目にすることができます。みなさんも「生駒山の方に向かって右（左）」といったふうに、無意識に方角の手掛かりにしていることもあるのではないのでしょうか。

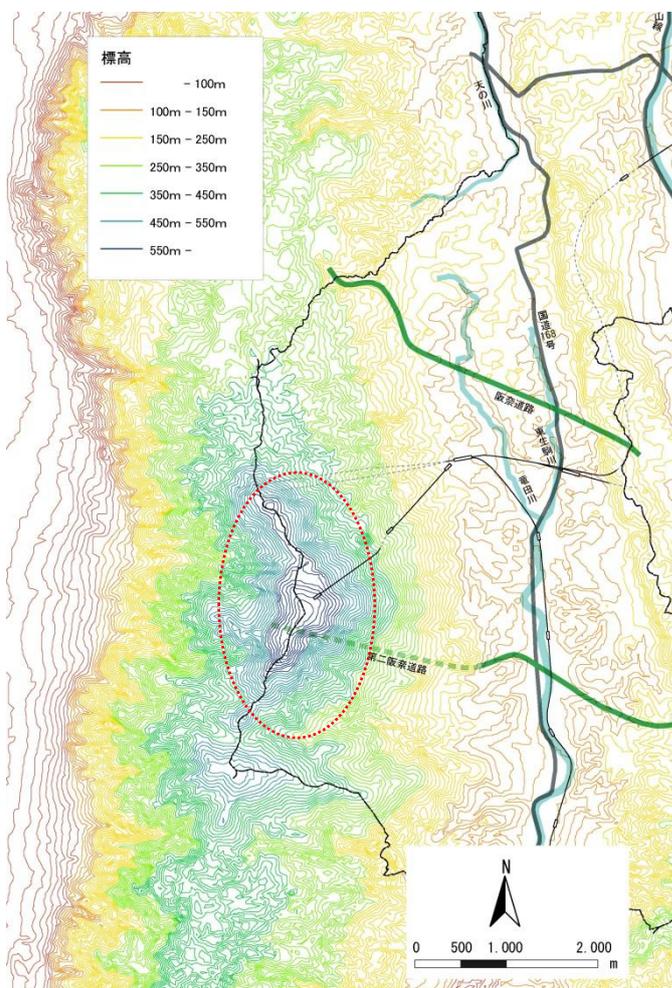
特に意識はしなくても、いつもそこに生駒山がある——それだけで安心感を与えてくれる生駒山は、なくてはならない生駒の景観の要素となっています。

生駒山 東から／西から

生駒谷側から見た生駒山は、山と谷の距離が近いことから、独立した美しい峰でありながらすぐそこにある親しみ深い山として、わたしたちを都会の喧騒から守るようにそびえています。

一方、大阪側から見る生駒山はまた別の表情をしています。南北に27キロという長さで連なっている生駒山地として、その姿はまるで奈良と大阪を隔てる屏風のようです。

生駒山の東斜面はかつて地底でした。それが西に隆起して高い峰をつくり出したので、東西は地質も景観も違ってきます。等高線を見ると、生駒山系は全体として標高350～450m程度のなだらかな山なみを形づくっていますが、標高550m以上の山頂部は生駒側に突き出した形になっています。生駒側からは独立した峰のように見えるのは、そのせいかもしれません。



生駒山を中心とした標高図



生駒谷側から見た生駒山



大阪側から見た生駒山



「生駒聖天」の名で全国から信仰を集める宝山寺と境内の般若窟（門前町）

2) 信仰の対象としての生駒山

生駒山は昔から、その神聖な姿により、遠く離れた所からはるかに拝む遙拝の対象ともなっていました。万葉集には、九州におもむく防人たちが、大阪湾から生駒山を仰いで詠んだ郷愁の歌も残されています。

難波門を漕ぎ出してみれば神さぶる
生駒高嶺に雲ぞたなびく
(万葉集・巻二十)

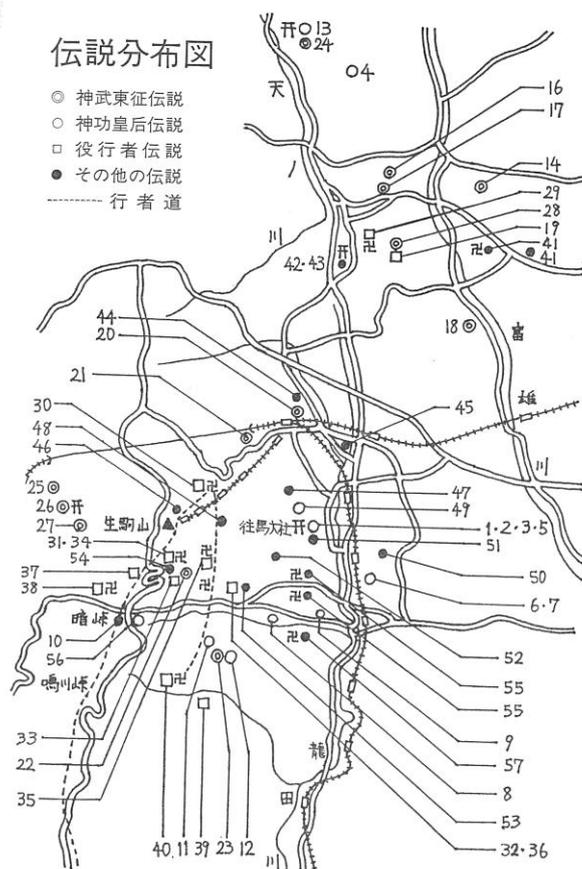
往馬大社は、古い書物にも名前が登場する歴史ある神社です。生駒山を御神体として祀っていたと考えられており、山頂からちょうど真東の方向に位置しています。



往馬大社（壱分町）

また、生駒山中は、山へ籠もって厳しい修行を行うことにより、霊力や悟りを得ることを目的とする修験の場もありました。現在でも、いくつもの行場があります。

宝山寺は、約 300 年前に湛海律師たんかいりっしが中興開山し、「生駒の聖天さん」と呼ばれ、市内外から信仰を集めてきました。般若窟と呼ばれる岩屋では修験道の開祖といわれる役行者えんのぎょうじゃが吉野の大峯山や金剛山などを開く前に、宝山寺で般若経を書き写して納めたと言われており、弘法大師も修行したと伝えられています。そのような伝説にちなんだ史跡が生駒谷の各所に伝承されています。



伝説の分布

出典：『生駒谷の祭りと伝承』桜井満、伊藤高雄編

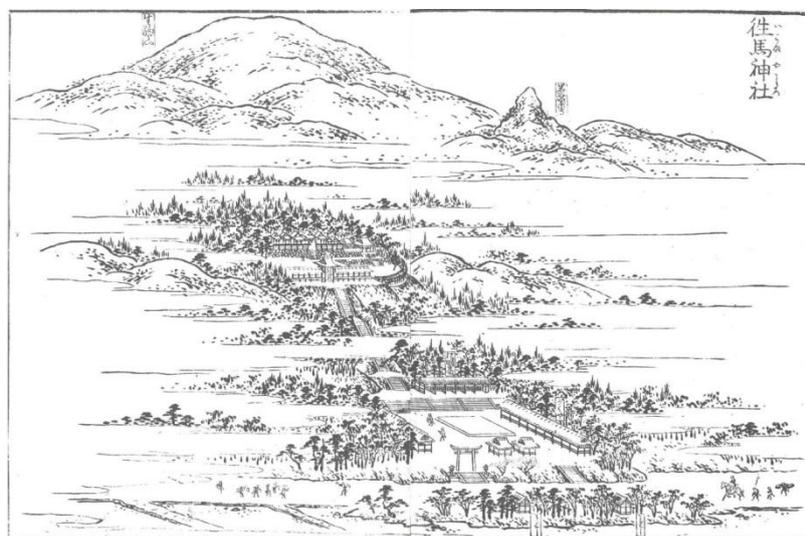
生駒山がそのような数々の伝説に彩られていることを知れば、生駒山を見る目が変わってくるのではないのでしょうか。

名所図会に見る生駒谷

昔の生駒谷の景観は、江戸時代の観光ガイドブックとも言われる「大和名所図会」や「河内名所図会」に描かれています。

上の絵には生駒谷十七郷の氏神である往馬大社が描かれています。背後には生駒山が鎮座しており、御神体として祀られていたと考えられることがよくわかる絵です。昔も今も、往馬大社に参詣すると、自然と生駒山に向かって手を合わせる格好になっているのです。

下の絵には宝山寺が迫力のある般若窟とともに描かれています。生駒山のこうした巨岩・巨石が露出する場所は、昔から修験のための場所として知られてきました。



往馬大社と火祭り

往馬大社は、正式には^{いこまにいますいこまつひこじんじや}往馬坐伊古麻都比古神社と言ひ、平安時代に編纂された延喜式にも載る式内社で歴史ある神社です。

お祀りされているのは、伊古麻都比古神・伊古麻都比賣神^{いこまつひめのかみ}をはじめとする7柱の神様です。平安時代の書物には「火燧木」^{ひきりぎ}（浄火を起こす道具）を朝廷に献上していたとされ、朝廷の信仰も得る存在でした。大和朝廷成立の頃から、火にかかわる信仰をもつ神社として知られ、現在も執り行われる「火祭り」はそこに起源があると言われてています。

火祭りを見てみると、中心的な役割をつかさどる「ベンズリ」の服装は平安朝の武官そのものです。また、火の燃えあがる松明を持って駆け抜ける「火取り役」の姿は鎌倉期の山伏姿そのもので、祭りに関する禁忌やしきたりがことのほか厳しいことから、祭りの成り立ちには修験者などが深くかかわっていたものと推測されています。



往馬大社の火祭り

役行者の伝説～^{しょうへえ}庄兵エ道

生駒山の中腹には、宝山寺から教弘寺や鶴林寺を経て平群町の千光寺まで通じる「庄兵エ道」があります。江戸時代に整備されたものですが、古くは修験者が山駆けをして修行する行者道でした。

また現在鶴林寺のある付近は鬼取山と呼ばれており、鬼の親子が棲みついて悪さを繰り返していたところ、役行者が現れて鬼を改心させたという伝説が残っています。

生駒山の独特の雰囲気、霊山として多数の修験者を惹きつけ、伝説が生まれ受け継がれてきたのです。

参考：『生駒谷の祭りと伝承』桜井満・伊藤高雄、『生駒谷の七森信仰』、今木義法 『生駒の祭礼』（教育委員会）



緑に包まれた市街地（萩の台駅から）

（３）緑のまとまりとまちの関係

１）緑の中に見え隠れするまちなみ

生駒の市街地は、竜田川と富雄川の流域を中心とする２つの谷筋の斜面に沿って発展してきました。

このため、谷筋から見上げると、斜面に残された樹木が緑の帯となって丘上の市街地を覆い隠し、背景の生駒山や矢田丘陵、西の京丘陵とあいまって、あたかも緑の中に家々がとけ込んでいるように見えます。緑に包まれたまちとして生駒を印象付ける、やさしい眺めですね。



高台から見下ろす緑豊かな生駒の市街地（あすか野）

2) 市街地に散りばめられた緑

竜田川流域の高台から市街地を眺めてみると、山や丘陵の緑を背景に、斜面地に残る緑や集落の森が緑の島のようにになって、まるで市街地の海の中に浮き上がっているような印象を受けます。

遠近様々な緑が織りなす景色も、生駒らしい眺望景観のひとつです。

2. 地域性

集落・住宅地・まちなみ

それぞれから見える生駒の景観物語



2-1. 集落の歴史

伝統と自然に寄り添う暮らし・モリ信仰
集落空間の根底にある景観





地藏の景観



火の見櫓の景観



神社の景観



井戸の景観

- 左上：道端のお地藏さん（西菜畑町）
- 右上：写真中央にあるのが火の見櫓（萩の台）
- 左下：稲蔵神社（小明町）
- 右下：共同の水汲み場（高山町）

（１）集落の成り立ち

１）集落の中心と境界

生駒には、江戸時代に 23 の村があったそうです。村は住居が自然に集まった集落で成り立ち、大きな集落には水汲み場や火の見櫓ひみやぐらがつくられたところもありました。これらの場所は、集落の中心としての交流の場となり、その名残なのか、今では集会所や公民館などが建っているところもあるようです。一方、集落のはずれにはお地藏さんや墓地、神社やお寺などが建てられたことが多いことから、境界を示していたのではないかと思います。

このように、集落は中心と境界のあるコミュニティとして、一つのまとまりを形成しています。



左上：石垣や生垣をほどよく組み合わせた家（藤尾町）

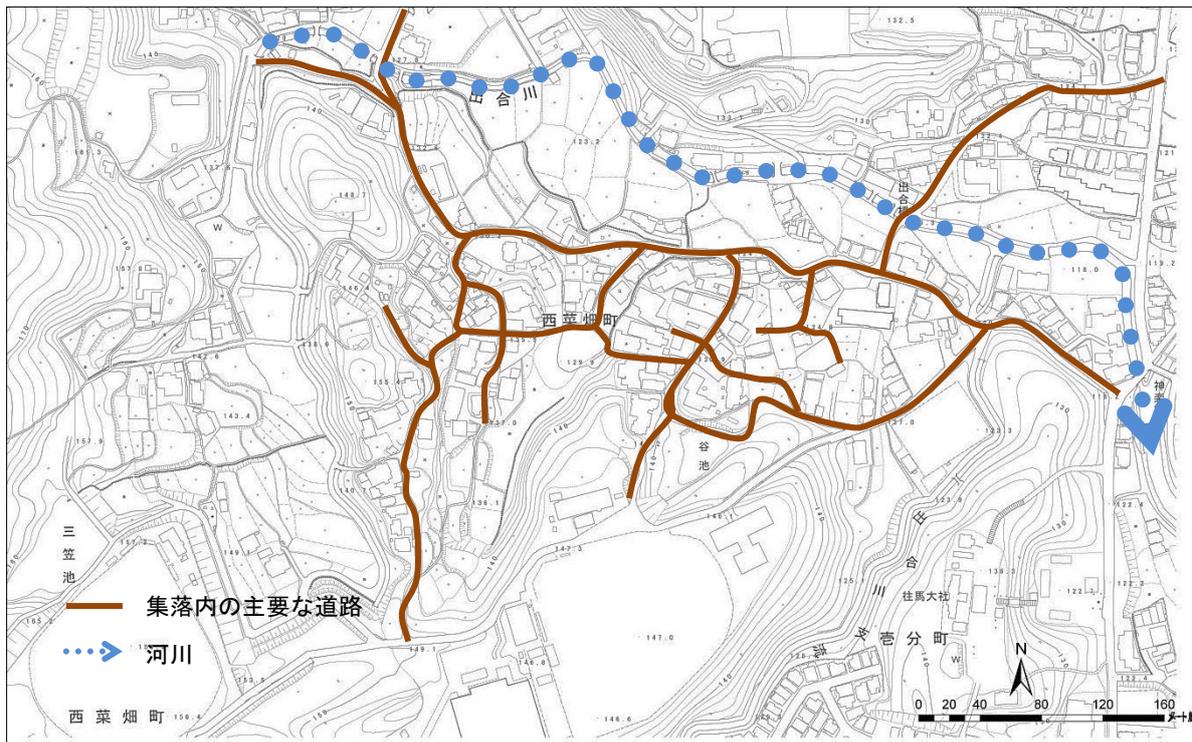
右上：屋根や壁が入り組んだ曲がった道（萩の台）

左：眺めの良い場所から見渡せる屋根なみ（萩の台）

2) 地形との関係

斜面地に広がる集落では、地形を尊重して凹凸に沿うように田畑が耕され、家が建てられてきました。例えば高低差が大きい場所では、石垣や生垣をほどよく組み合わせるなどの工夫がされています。こうした自然に寄り添う土地の使い方は、人の手によってつくられた景観として、見る者に安心感を与えます。

また、生駒谷では集落や社寺が斜面地にあることから、眺めの良い場所もたくさんあります。



道・川の曲線に寄り添うように建つ家（西菜畑町）



敷地の外的ことも内からうかがえ、また外からも内の気配がほどよく分かる敷き際（新旭ヶ丘）



入口を目隠しする樹木（南田原町）

3) 道との関係

山すそにある起伏の大きい集落の中には、等高線に沿った高低差のない道と坂のある道があります。多くの建物は道の形を変えるのではなく、沿うように建てられてきました。ここでも地形を尊重する姿勢がうかがえます。

また、内と外で互いに生活や季節の移ろいを感じられるような敷き際（敷地の道路に接する部分）のしつらえを多く見ることができます。生活の一部が外へにじみ出ることにより、通りを表情豊かないきいきとした空間にしています。



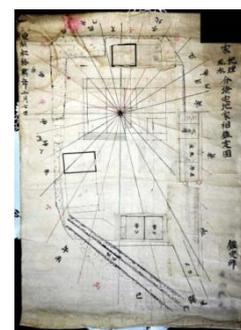
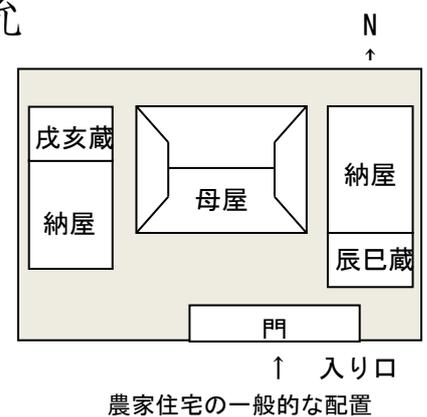
農家住宅（高山町）

（２）受け継がれてきた伝統

１）敷地内の建物配置

集落内の代表的な農家住宅は、母屋と付属屋から成り、蔵は二つあるのが一般的だったようです。配置される方角の名前を付けた北西にある「戌亥蔵」には道具や茶碗を、南東にある「辰巳蔵」には米を収納していました。また、農機具などの収納と作業場として納屋も設けられ、母屋との関係で配置が決まったそうです。

これらの配置は、広い範囲の集落で見ることができ、伝統の様式とすることができ、まとまりのある集落の景観を形成するための土台となっています。



方角と家屋の配置を示した昔の鑑定図



左上：入母屋造りの屋根 三角形の部分が破風（高山町）

右上：門屋のある家（北田原町）

左：蔵の外壁 漆喰の化粧仕上げと杉の焼板張り（高山町）

2) 風土が練り上げたデザイン

集落では、気候や風土、生業などに合うように生活の中で工夫が重ねられ、長い年月をかけて磨かれてきた意匠（デザイン）があります。

代表的なデザインは、蔵の外壁や生駒石などを庭石や石積み用の石として使われるものが挙げられます。また、集落ごとに特有のデザインもあります。例えば、敷き際には立派な門屋を設けるところもあれば、庭木を植えるところ、生駒石で石垣をつくるところもあります。大和棟など独自に発展した屋根の形もあります。

このことは、各集落の職人の技術が明文化されない独特の約束事として受け継がれてきたこととも深く関係しています。練り上げられたデザインが、その集落らしい景観をつくり出しています。

生駒の住まいの伝統を守る ～大工さんのお話から～

生駒では昔から家を建てる場合、棟梁を筆頭に大工、左官、瓦葺などの職人が技を結集してつくり上げてきました。

家のつくりは似通っているように見えても、棟梁が地形や敷地の方角、地域で大切にされている習わしなどを考慮し工夫しているのです、二つとない家ができるのです。



福田さん

生駒に共通する建物の配置や間取り

生駒在住の大工、福田さんによれば、生駒谷における建物の配置や間取りには、共通点があるといいます。間取りは、通り庭、台所、牛屋、座敷からなり、二階は設けない場合が多かったようです。天井裏は「^{ずし}厨子」と呼ばれ、防火のために土を10cmほど塗り固めておき、この空間は、屋根を葺き替えるための材料として麦藁を収納しておくために利用されていました。麦藁を10年間ため続けると、ちょうど屋根一枚分ほどの量になったそうです。

屋根の形は「入母屋造り」が美しいと言われ、その「破風」(前ページ左上の写真)のつくりで大工や設計者の腕前が分かるそうです。木造建築に詳しく、経験豊富で技のある人しか、大きく立派な破風をつくることはできません。

生駒の各所で見られる大きな「門屋」は、男たちが夜なべ仕事をする「^{おとこしべや}男衆部屋」や、奉公に来ていた人たちが寝泊まりする部屋として使われていました。門を設けるのが習わしとなっている集落もあり、門がないと違和感があるといいます。

伝統とは

「100年もつ家は、200年でももつ」。国宝姫路城の瓦の葺き替えも担当されている日本伝統瓦技術保存会会長である生駒の瓦葺職人、山本さんの談です。

伝統的な工法でつくった家は、日本独特の湿気の多い気候に合うよう改良が重ねられると同時に、長く住み続けることを前提として洗練されてきました。「骨格さえしっかりしていれば、屋根や壁の部分だけを補修しながら持続的に住み続けることが可能である」と仰っておられます。



山本さん

出典：市広報紙

一方で、「建築の技は変化するものであり、技術をさらに磨いていくためには、伝統を守ることだけが大切なのではなく、伝統技術の研究と試行の積み重ねが大切である」とも仰います。生駒の地でも長い年月をかけて、それぞれの職人の工夫と実践により、伝統は育てられてきました。その伝統が、今のまちなみの中に息づいて、生駒の景観の特徴として表れているのではないのでしょうか。

多くの家が建ち、生駒のまちなみもずいぶん変わってきました。しかしよく見ればその中にも、蔵・母屋・門のリズミカルな繰り返しや、屋根の勾配や形・壁の仕上げの美しさなど、伝統を受け継いだ家屋も見て取ることができます。

職人の方々は、「家は住民の人となりを表わす」と言います。時に応じて日頃の生活を振り返り、居住まいを正しながら暮らすことの大切さを教えられます。



モリさん（西菜畑町）

3) モリ信仰と風習

かつて各集落には、「七モリ」といわれる樹林地が存在していました。現在も生駒谷の各地にモリさんが伝承されています。

時代とともに人々の生活様式は変化し、七モリに対する畏敬の念も薄れていますが、世代を超えて様々な言い伝えとともに受け継がれ、生活習慣や空間利用の中にひっそりと息づいています。

市街地が拡大し、集落のまとまりもあいまいになりつつある中で、集落の境界に取り囲むように存在していた七モリは、古くからの集落の場所を知る手がかりにもなっています。

生駒谷の七モリの伝承

各集落にある七つのモリ

モリを神聖視する信仰は、原始的な民間信仰として日本全国で見られますが、それぞれの集落に七つずつモリが存在するという事例は、あまり類を見ません。

モリにはいくつかの形があります。樹林だけが生い茂っているモリが、本来の姿だったと考えられ、年輪を重ねた巨樹やうっそうと茂る樹林には神秘的な雰囲気漂い、そこに神が宿ると信じられてきました。そのほかには、樹林と石造仏や社などが祀られているモリもあります。



モリさん（萩原町）

萩原は信仰心の旺盛な土地柄で、往馬大社の神事を司る「宮座」が今も継承されています。この地では七モリもよく保存されており、生駒市教育委員会はモリに「保護樹林」の表示板を立てて、保護を呼びかけています。

七モリにまつわる伝承

モリの木を伐ると激しい祟りを受けると信じられていて、小枝一本折ってもいけない、枯葉一枚持ち帰ってもいけない、と禁じられてきました。戦時中に燃料が不足したときも、モリの樹には手をつけなかったそうです。禁忌を犯したために、恐ろしい祟りを受けたという体験談が、今も語り継がれています。



モリさん（西菜畑町）

一方で、モリの多くは集落を取り囲むような位置に祀られており、外から疫病神などの邪悪なものが入ってこないように、集落を守ってくれる守護神の役目もありました。村境にあるモリでは、「カンジョウ縄」を掛けて結界する行事を行っていたところもありました。

モリ信仰から学ぶこと

生駒で民俗学を研究しておられる生駒民俗会会長今木義法先生から、「モリさん」から学ぶことを教えていただきました。

～～先人たちが、モリのカミを畏敬し、厳しい禁忌を守ってきた信仰があって、その結果として、今の生駒の緑豊かな景観が守られてきたのです。こうしたモリ（自然）への畏敬の念を忘れてはならないと思います。



モリさん（萩の台）

往馬大社の社そう林は見事な原生林ですが、これは人間が手を加えて守ってきたのではなく、「手を加えなかったから守られてきた」のです。

急激に都市化されてしまい、モリのいくつかが消滅してしまいました。「モリを失ったことにより、自然を大切にする豊かな心をも失ってしまった」のではないかと心配しています。

景観を考える上でも、まちの歴史と文化を大切にする心を養い、自然への畏敬の念を根底に据えることが大切だと思います。～～



参考：『生駒谷の七森信仰』今木義法

2 - 2 . 住宅地開発の流れ

緑豊かな住宅地・生駒の顔となる駅前
生駒の発展物語





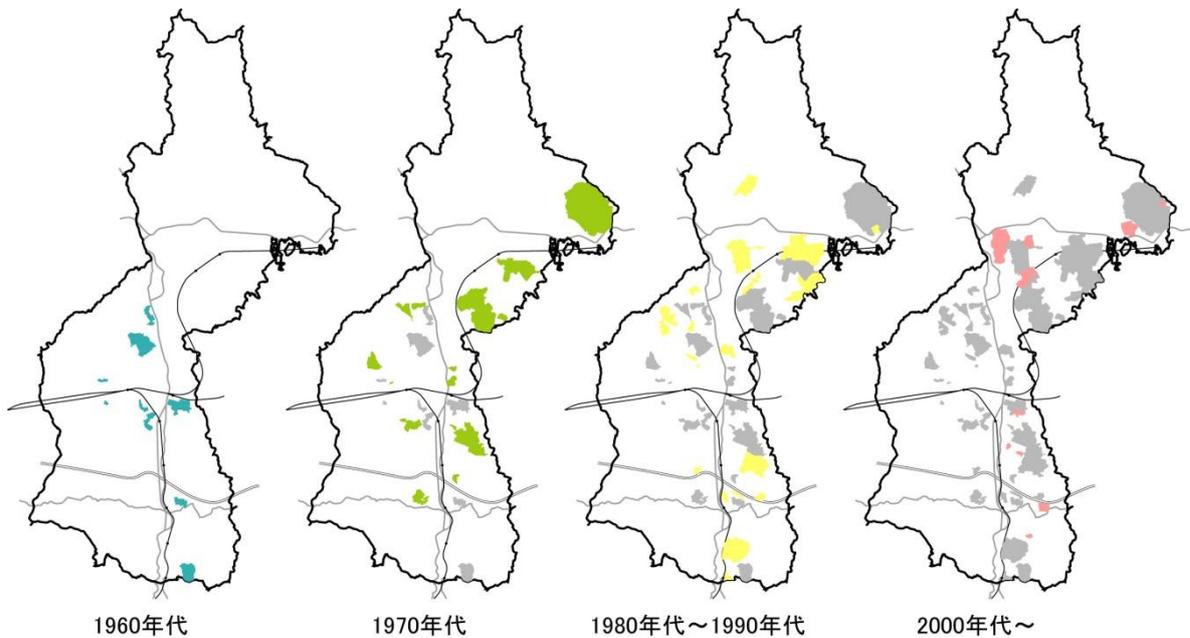
住宅地のまちなみ（喜里が丘）

（１）住宅地の開発と地形

１）平地から斜面地へ

鉄道が整備された 1960 年代以降、多くの住宅地がつくられてきました。当初は生駒谷の谷筋の平地などを中心につくられ、年代を経るごとに斜面地や頂上付近にも広がっていきました。

住宅地は、まちなみが似通っている部分も多く見られますが、つくられた年代によって立地する地形が異なっているため、それぞれに特徴が見られます。



年代を経て進んだ住宅地の開発

1960年代	生駒谷の谷筋の平地を中心に、一部矢田丘陵の西向き斜面などで開発が始まる
1970年代	矢田丘陵の西向き斜面、生駒山麓の東向き斜面での中小規模の開発、富雄川流域の斜面や山田川流域の南向き斜面などでの大規模な開発が進む
1980～90年代	1970年代の立地傾向がさらに進むが、比較的標高の高いエリアでの開発が多くなる
2000年代～	矢田丘陵の西向き斜面や東向き斜面を中心とする中小規模の開発のほか、山田川流域の南向き斜面も開発が進む

生駒の住宅地開発

鉄道の開設に伴い計画的に住宅地を開発してきた（株）近鉄不動産の担当の方に、生駒での住宅地開発の特徴についてうかがいました。

～～やはり、生駒は空気がきれいであることや緑が豊かであることを評価する方が多いですね。帰ってきてほっとできる住宅地なんだと思います。

昔は、住宅の立地は生駒山の東向き斜面が中心で、矢田丘陵側は少なかったのです。それは、生駒おろし（生駒山からの風）が強いためだと言われています。東生駒駅の設置とあわせて、周辺の矢田丘陵の西向き斜面での住宅地開発を進めましたが、生駒山への眺望があることも評価されて購入されたのではないのでしょうか。

ゆとりのある落ち着いた住宅地として開発の様々な場面で配慮しました。昔ながらの住宅地では、道路よりも敷地を 50cm～1m ぐらい高くして、擁壁には生駒石を使うことで風格あるまちなみを生み出すようにしています。

これからも大切に住み続けていただければ嬉しいです。～～



住宅地を見渡せる眺め（南山手台）

2) 住宅地を見渡せる場所

斜面地や標高の高い地域の住宅地には、眺めの良い場所があり、そこからは、市街地や山なみが一望できます。

これらの見渡す景観を「眺望」といい、谷の地形である生駒らしさを表した景観であるといえます。



通りの先に見える生駒山（さつき台）

3) 通りの先に見える山

通りの先に生駒山や矢田丘陵が見える住宅地では、自然にこれらを目印としていませんか。道案内のときに「生駒山に向かって右側」といった案内をされることもあるかと思います。このように、存在感のあるものが日常生活の中にとけ込むと、目印として方向を決めたりするものになります。

また、通りに面する敷地から見えるということは、そこで暮らす人にとって郷土愛を育むことにもつながっています。



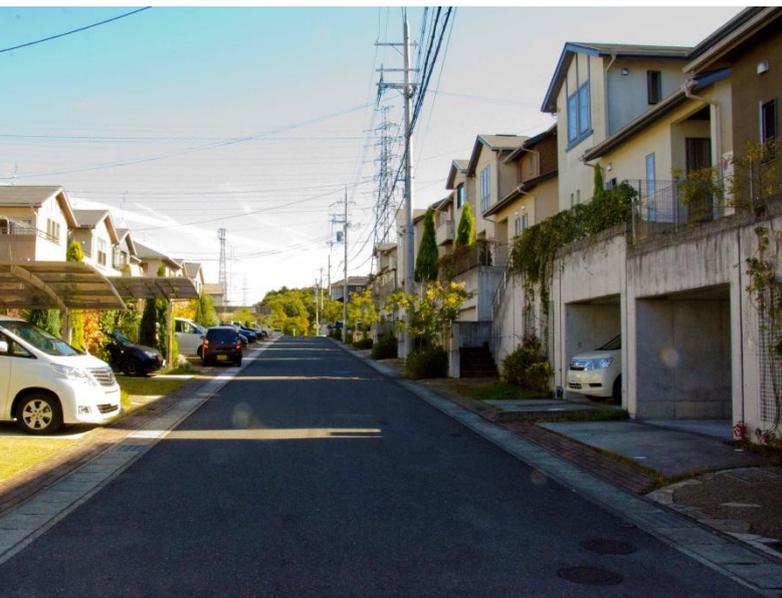
表情をつくる敷地の際（東生駒）

（２）住宅地の個性を生み出す要素

１）敷地内の緑の空間

通りから見える敷地の際（きわ）が、まちなみの表情を生み出す重要な要素となっています。

1960年代から1970年代につくられた住宅地では、敷地にゆとりがあることが多く、通りからも緑をたくさん目にするため、緑豊かなまちなみの印象をつくっています。



左上：石積みと生垣の敷き際（生駒台）

右上：生垣の敷き際（北大和）

左下：オープン外構の敷き際（西白庭台）

右下：オープン外構や擁壁の敷き際（美鹿の台）

2) 敷き際のしつらえ

石積みや生垣、擁壁、塀や生垣を設置しないオープン外構など、敷き際のしつらえは住宅によって様々です。

1960年代から1980年代につくられた住宅地では、石積みと生垣からなる敷き際を多く見ることができ、重厚感ある落ち着いたまちなみとなっています。

1990年代に入ると、オープン外構を多く見ることができ、軽やかな印象を与えるまちなみとなっています。



再開発事業で整備された生駒駅北側（谷田町）

（３）計画的に開発された市街地

１）まちの顔をつくる駅前空間

駅前には、生駒を訪れる人を最初に迎え入れる場所という意味で、まちの第一印象を左右する顔となる場所であるといえます。

生駒駅北口で進んでいる再開発事業では、建物のデザイン要素が絞り込まれるなどの一定の方針に基づき、洗練した印象を与える景観づくりが行われています。

顔となる空間をつくる

生駒駅の北口・南口の再開発に携わった市の担当者から、景観上配慮したことを聞きました。

●生駒駅前南口地区の再開発事業

「グリーンヒルいこま」(昭和 58 年)

- ・生駒山は駅から丸みを帯びて見え、山というより丘陵のように目に映ります。それを意識し、スイスの切り立ったアルプス山脈というよりは、南欧のやわらかな山なみをイメージし、そのデザインを取り入れることとしました。



●生駒駅前北口第一地区の再開発事業「アントレいこま」(平成 9 年)

第四地区の再開発事業「アコールいこま」(平成 17 年)

- ・交通広場の中央に、奈良県出身の彫刻家・井上武吉さん製作のモニュメント「my sky hole 97 生駒」を設置しました。手のような丸みを帯びた形をしており、駅に向かって「いってらっしゃい」「おかえり」を言っているような形になっています。
- ・再開発地区は、駅周辺にあるメディカルセンターをもとにして、全体的な色合いをそろえました。
- ・北口でも生駒山を意識しており、2階部分のデッキから生駒山を望むことができるようにしています。また、山なみを意識して円弧の形状を多く取り入れたデザインとなっています。





白庭台駅前の景観（白庭台）

2) 場所の声を聞きとるまちづくり

新しい駅がつけられると、駅を中心としたまちづくりが進められていきます。駅の雰囲気を取り、計画的にまちをデザインしていけば、駅から見渡す景観に統一感が生まれ、結果として特徴ある景観がつけられます。

例えば白庭台駅では、白庭台住宅地の玄関口として、調和したデザインを取り入れた形で病院やマンションなどが計画されました。さらに駅前には緑が植栽され、うるおいと落ち着きのある景観がつけられています。

2-3. にぎわいと

心の拠りどころ

宝山寺参道、商店街、身近な駅

人の集まる場所の景観





参道筋商店街（本町）

（１）にぎわいの空気

1) かつての面影を偲ばせる参道の景観

生駒駅がつくられ、宝山寺に参詣する人が増えると、参道を中心に旅館や土産物屋、飲食店など参詣者をもてなすためのお店が軒を連ねました。

今でも、5～6mの幅の道路沿いに、花街の名残を留める和風建築物や風情ある看板、街路灯など、かつての面影を偲ばせる建物もあります。



宝山寺門前町

門前町界隈の情景

昔から参詣者を多く集める寺院や神社の周辺には、社寺関係者や参詣者を相手にする商工業者が自然に集まり、まちが形成されました。そのまちを門前町と呼び、全国各地に門前町があり「全国門前町サミット」が開催されるほどです。

生駒の門前町は、宝山寺の参詣者が増えるにしたがい、飲食店や土産物屋が軒を連ねるようになりました。さらに「生駒の聖天さん」と呼ばれ、現世利益を求める多くの人々が参詣するようになり、観光サービスの料理旅館や茶屋、置屋などができて発展しました。その後、大正時代には石段が舗装され、参道沿いは市街地へと姿を変えていきます。

今でも、その頃の名残を少しではありますが感じることができます。昔に思いを馳せながら、参道沿いの建物を眺めつつ、宝山寺へ参詣してみるのも良いかもしれませんね。



宝山寺門前町の様子（昭和40年頃）

石畳の敷かれた参道の両脇には、土産物店、料理旅館などが軒を連ねる参道からの眺めもまた売りのひとつ

出典：『大和郡山・生駒の100年』



びっくり通り（生駒駅前商店街）の様子（元町）

2) 商いが生み出すにぎわい

生駒駅前商店街では、様々な演出と工夫をしています。商店街内の道路とお店の間にほどよく商品を並べることで、商店主がお客とコミュニケーションを取りやすくしたり、季節感のある飾りや花で統一的に演出したりと、商店街という場所ならではのにぎわいの景観をつくっています。

お店とは

「店」という言葉を辞書で調べると「商品を陳列して売る場所。商店。たな。」とあり、「見世棚の略から」とあります。では、基となった「見世棚」を調べてみると「商品が見えるように並べてある棚。また、その棚のある店」とあります。つまり、お店とは商品が「見えるように並べてある棚」がある場所になりそうです。

お客とお店をつなぐ軒先に棚がずらりと並ぶ様子は、商店街ならではの景観であり、今も昔も変わらないことが宝山寺駅前の昔の写真からも知ることができます。



宝山寺駅前（昭和40年頃）

出典：『大和郡山・生駒の100年』



萩の台駅前の眺め（萩の台）

（２）住宅地の駅周辺の空気

住宅地の近くにある駅は、住民が日常利用する玄関口として、生活にかかわりの深い場所です。駅前には緑が育てられ、帰ってきてほっとする親しみ深い景観が広がっています。

近鉄生駒線のそれぞれの駅周辺からは、生駒山の姿を望むことができ、降り立つ人を安心させる景観となっています。さらに、生駒山の手前に広がる農地や集落と一体となった景観を目にすることができ、季節感を感じることができます。



菜畑駅前の眺め（中菜畑）



上 : 国道 168 号沿道 (東生駒駅付近)
左下 : 国道 168 号沿道 (一分駅付近)
右下 : 住宅地沿いの緑豊かな沿道 (白庭台)



(3) 幹線道路の空気

国道 168 号の東生駒駅付近は、電線が地中化され、商業施設が建ち並ぶ中にも落ち着きある沿道景観をつくっています。

菜畑付近では、生駒山系、矢田丘陵に挟まれる形で国道が走っており、広い幅員の道路と街路樹と周辺住宅の緑が連なる気持ちの良い沿道景観をつくっています。

道路沿道は、広告物についての規制が適用されており、他都市と比較しても落ち着いたまちなみとなっています。



3. 暮らし

生業・祭礼・原風景

暮らしが織りなす景観



子どもたちが元気に公園で遊ぶ様子（桜ヶ丘）

（１）何気ない暮らしの景観

わたしたちが普段、何気なく目にするのは、人々の当たり前の暮らしの営みがつくる普通の景観、つまり生活景です。特別なものではないため、景観として意識することはあまりないかもしれません。しかし注意深く観察してみると、何気ない暮らしの景観の中にもいきいきとした暮らしぶりを感じさせる魅力的な景観がたくさんあることに気付かれるのではないのでしょうか。

このような生活景が、生駒の景観の大部分を占めています。



田園景観（高山町）

（２） 生業の景観

１） 農の景観

農地がつくる景観は、場所や時期によって様々な印象があります。平地に広がる農地では、手入れの行き届いた農作物と背後の山の緑が一体となって開放感を与えてくれます。また、斜面に沿った棚田は、その地形をいかし住民の手が加えられている様子を垣間見ることができ、そこに美しさを感じます。



棚田の景観（西畑町）

これらの農の景観は、生駒の景観の地をつくり、人々にとっての原風景のひとつとなっています。



竹の寒干し（高山町）

2) 伝統産業の景観

地域の風土の中で育まれてきた伝統産業が独特の景観を生み出しています。高山町では、茶釜や竹器づくりが盛んで、その材料となる竹の寒干しが、茶釜の里ならではの冬の風物詩となっています。

また、古くからの造り酒屋は、白い漆喰の壁が美しく、店先にある杉玉が映えて、伝統の景観をつくりだしています。



造り酒屋（小瀬町）

誇りをかけて守る伝統産業 ～高山の茶筌づくり～

高山茶筌のルーツは室町時代まで遡ります。大和鷹山城主の次男、鷹山民部丞たかやまみんぶのじょうにゅうとうそうせつ入道宗砌が創始と伝えられています。茶道の祖の村田珠光から千利休へと、茶道の隆盛と共に茶筌作りが活発になり、現在も高山茶筌はすべて職人の手作業によりつくられています。その国内生産のシェアは、全国の90%以上を占めています。



茶筌

この伝統産業である茶筌づくりを受け継いでおられる奈良県高山茶筌生産協同組合の谷村さんに、茶筌づくりについてうかがいました。

～～～材料となる竹は、高山近辺や近郊から調達しています。高山は、寒暖の差が大きいので、竹が引き締まるのではないのでしょうか。



谷村さん

茶筌づくりの作業は大変な仕事です。一日7本の茶筌を完成させて一人前と言っています。起きてから寝るまでが職人の仕事で、一日14時間くらい作業にあててらるんです。夜の方が作業に集中できますね。

安価な海外製品が流入する中、先代が何とか日本の茶筌づくりを途絶えさせなかったのは、偉業だと思っています。茶筌づくりは家業なので、使命と誇りを感じています。技術を受け継ぐものとして、技術を守り抜いていくという自覚を持つことが大切。ずっと日本でつくり続けていくという、文化を守る姿勢はものづくりに共通するものではないのでしょうか。

工芸品というのは、高山で職人が一つ一つつくった結果生まれたものですが、価値はそれができあがる背景にあると思います。買い手にはこの背景の部分もちゃんと理解し、評価してほしいですね。一見同じ製品に見えても、背景の違いを理解すれば、また違って見えてくる。これはまちなみでも同じことで、まちの成り立ちなどの背景を理解することで、まちをより味わうことができる。

目が利く「文化人」が増えてほしいと切に思っています。価値観が変化し、古美術や骨董を求める人が少なくなってきました。良いもの、本物に価値を認め、お金を支払うような文化が廃れつつあります。

最近では、茶筌づくりのほかに、茶の文化を広めるための教室を開催しています。子どもと親が体験できる機会も、イベントに合わせて提供しています。茶筌を身近に感じることで、関心・興味を引き出し、次の担い手を増やしたいですね。～～～

(3) 記憶の原風景

1) 歌に込められたふるさとへの思い

後世に伝えていきたいふるさとへの思いが、和歌や校歌に織りこまれています。

市内の小学校の校歌には、生駒山が堂々たる姿で鎮座している様子や、人々から神聖視されている様子が、矢田丘陵を歌う言葉からは爽やかな表現が歌詞に使われています。

また、生駒川（竜田川）、富の小川（富雄川）は、清い流れと結びつきが強い表現が用いられています。

小学校の校歌に生駒の景色がうたわれています

♪ 若いいのちの 歌声が 生駒の山に こだまして～ (生駒小学校)

♪ 生駒の山に ひびくのは～
生駒の川に うつるのは～ (生駒南小学校)

♪ 霊峰生駒を 仰ぎ見る～
富の小川の せせらぎの～ (生駒北小学校)

♪ 松のみどりに さきまじる つつじは あかく 矢田の丘～
雲は明るく たなびいて どっしりたった 生駒山～
流れきらきら 生駒川～ (生駒台小学校)

♪ 矢田のやまなみ 背にうけて 生駒山を ながめつつ～ (生駒東小学校)

♪ ～富の小川の せせらぎに～
～生駒の山に 親しんで～ (真弓小学校)

♪ 流れる雲よ広い空 生駒の山はよびかける～ (俵口小学校)

♪ 緑の風すぎゆく丘に みはるかす大和の山なみには 遠くはるかな歴史がたゆたい～
(鹿ノ台小学校)

♪ 古い歴史の生駒路を～
生駒おろしの吹く丘に～ (桜ヶ丘小学校)

♪ せせらぎは 富雄の川に～
浮ぶ雲 生駒の山に 交りて～ (あすか野小学校)

♪ 緑の野山にかこまれて～ (壱分小学校)

♪ 緑の山に 包まれて～
瀬々らぎ 澄みて 往く水に～ (生駒南第二小学校)



和歌に詠まれた生駒に流れる川

千早ぶる 神世もきかず 竜田川
から紅いに 水くくるとは

『古今集』巻五 在原業平

古歌に詠まれた竜田川（立田川）は、生駒山北部に発して、生駒山地と矢田丘陵の間の生駒谷を南流し、生駒郡斑鳩町南西部、三室山の南で大和川に合流する川を指します。上流部は生駒川、中流部は平群川と呼ばれます。

いかるがや とみのを川の たえばこそ
わが大君の み名を忘れめ

『拾遺集』 哀傷

富雄川はかつて富の小川と呼ばれていました。生駒山地北部に源を発し、生駒郡斑鳩町の東南端で大和川に合流する川を指します。

2) 地名から読みとる景観

生駒の地名は、自然の樹木や野生の動物などにちなんだ名前が多く見られます。このことから、生駒は自然豊かな地であったことが伝わってきます。

“クロ”

西五ヶ大字とは生駒山の南斜面中腹より山頂に至る地方に散在する集落で大門藤尾は稍々中腹に、小倉寺鬼取西畑はその上部に位置している。(中略)

古く万葉集に「妹に逢わずあらば、すべなみ岩根ふむ、生駒の山を越えてぞ吾が来る」(巻十五)とあるが如く、古代の人々がこの岩根を踏んで通っていた。(中略)

連続した今日の段々畑となるまでには徐々に開拓の歴史がある。最初は水田化の平坦を造るのに容易な緩傾斜部分から行なわれ、急傾斜地は残されて水田の縁辺部となる。これをクロという。ここはまだ原生林のまゝであって「中クロ」「黒沢」「大黒石」等の地名はここに付けられる。「くろんど池」は、「黒添池」でクロにある池を意味するという。富雄の「黒谷」などもこの類の地名である。最初はこのクロは原生の林のまゝで檜の木、楠の木、椿ヶ原、榊原等と呼ばれこれ等クロの木は農作物の乾燥や夏の木陰の休息地に利用され、又防風林となる場合も多く、農家の薪として燃料の供給に役立った。

出典：『生駒市誌』

3) 伝統行事の景観

お正月や端午の節句、七夕などの日は日常の景観を彩ります。また、人生の節目で訪れるお宮参りや七五三、成人式などの日の特別の装いも、日常の景観を華やかなものに変えてくれます。

暮らしの中に根付いたこれらの景観は、人々の記憶の中で生き続けます。

生駒の主な年中行事

1月元旦	歳旦行事〔さいたんぎょうじ〕
1月元旦黎明	往馬大社追鶏祭〔いこまたいしゃとりおいのまつり〕
1月中旬	小正月・トンド
2月3日節分	宝山寺節分星祭〔ほうざんじせつぶんほしまつり〕
4月1日	宝山寺大護摩会式〔ほうざんじおおごまえしき〕
4月第1日曜日	八大龍王春季柴燈大護摩供〔はちだいらゆうおうしゅんきさいとうおおごまく〕 〔鬼取町〕
5月5日	往馬大社御田植祭〔いこまたいしゃおたうえさい〕
6月30日	往馬大社夏越大祓〔いこまたいしゃなごしのおおはらえ〕
8月15日	往馬大社千燈明祭〔いこまたいしゃせんとうみょうさい〕
8月20日	長弓寺大般若会〔ちょうきゅうじだいはんにゃえ〕
9月秋分の日	宝山寺万燈会〔ほうざんじまんとうえ〕
10月 体育の日の前日	往馬大社例大祭（火祭り）〔いこまたいしゃれいたいさい〕
10月体育の日	素盞鳴神社例大祭〔すさのおじんじゃれいたいさい〕 伊弉諾神社例大祭〔いざなぎじんじゃれいたいさい〕
10月第3日曜日	高山八幡宮例大祭〔たかやまはちまんぐうれいたいさい〕
10月15日	住吉神社例大祭〔すみよしじんじゃれいたいさい〕
11月 第3か4日曜日	宝山寺般若窟柴燈護摩供〔ほうざんじはんにゃくつさいとうごまく〕
11月 勤労感謝の日頃	新嘗祭〔にいなめさい〕
12月上・中旬	ご回在〔ごかいざい〕
12月16日	宝山寺大鳥居大注連縄奉納〔ほうざんじおおとりいおおしめなわほうのう〕
12月下旬	住吉神社南田原長寿講カンジョウ縄奉納祭 〔すみよしじんじゃみなみたわらちようじゅこうかんじょうなわほうのうさい〕
12月31日	往馬大社師走大祓〔いこまたいしゃしわすおおはらえ〕

出典：『生駒市デジタルミュージアム』（教育委員会）



左上：火祭り（往馬大社）

右上：宮座行事（高山八幡宮）

左下：御輿（琴平神社）

右下：ダンジリ曳き回し（天満神社）

出典：『生駒の祭礼』（教育委員会）



竜田川クリーンキャンペーンの様子（中菜畑）

（４）活動の景観

１）地域を守る取組

集落では古くから道普請や溝掃除など、身近な公共の場所の掃除活動が行われてきました。このような住民が自分たちの手で公共の場所を守る様々な活動が、良好な景観をつくりだしています。



地域で取り組む美化活動の景観（鹿ノ台）

2) 景観づくりの取組

わたしたちの暮らしを取り囲む景観に思いを馳せ、興味を持つことが、仲間をつくり、活動の幅を広げ、地域全体でのアクションへと発展していきます。

すでに生駒では、河川の清掃や里山の整備、棚田の維持管理、花づくり、子どもの環境意識の啓発など、景観づくりの活動が各所で活発に行われています。

